

最優秀賞

「同胞意識と多文化共生」

兵庫県立夢野台高等学校 2 年生 黒田 知里 さん

私は日本語が大好きだ。発音や文字のバランス、漢字や助詞一つで文全体の意味が変わるところなど、全てに強く魅力を感じる。そのため、将来は日本語教師になって日本語の魅力を世界に伝えたい。そう考えている。しかしこの動画を見て、私は私自身の視野の狭さを痛感した。日本語教師は日本語の知識以前に、多文化に寄り添う力が求められる職業だ。教える相手の年齢、国籍を理解したうえで同じように見なす必要がある。教卓に立った時、私は果たしてそれができるのだろうか。そもそも今の私は「多文化共生」を実現する一員になれるのだろうか。そう疑問に思った。

動画の中で私が特に印象に残ったのは、ポリスの同胞意識の話だ。水源を求めて戦うライバルではあるが、同じギリシア語を使っていることから、ウクライナなどの他国へ赴いた時は協力的に活動する。そうやってギリシア人は共生していた、という内容だ。元々がみ合っていたり、特別仲が良くなくても、生まれ持った共通点によって同胞意識が育まれる。しかし、この同胞意識を持つということは、行き過ぎると共生とはかけ離れてしまうと私は考える。これは私が昨年韓国へ短期留学をしたときに感じたことが根拠として挙げられる。

私が行った短期留学とはある習い事のプロジェクトで、全国の学生十数名でホームステイと韓国主催のキャンプに参加するというものだった。同じ習い事とはいえ全員が初対面、飛行機で到着した後のホームステイ先はバラバラで、途中のキャンプで数日ぶりに顔を合わせるような関係性だった。そのため私は韓国人の友達を沢山作ろうと意気込んでいたのだが、途中のキャンプで私が仲良くなった子はほとんどが日本人だった。理由は簡単だ。日本語が通じる日本人同士で固まって行動してしまったのだ。私は韓国語が完璧に話せる訳ではないため、韓国人と話すとどうしても会話がうまく成り立たない場面が生まれた。よって、ほぼ初対面という同じ条件でも、言葉がうまく通じる日本人と話している方が楽に感じてしまったのだ。韓国の方々も集団でいる私たちに話しかけることはなく、韓国人は韓国人で、日本人は日本人で固まるという別々のコミュニティが形成されてしまった。これはここで言う「同胞意識」の悪い側面ではないだろうか。

また、動画の中で先生が何度も仰っていた「同じように見なす」という言葉も印象深かった。私は中学生の時、担任の先生に「誰にでも平等に接するのが貴方の良いところ」と言っていただいたことがある。意識的に平等に接している訳ではなかったが、人によって態度を変えないことの大切さをそのとき感じた。だが、短期留学での私の態度はどうだろうか。日本人ばかりと関わるということは、言葉が通じない人と関わろうとしないということである。それは誰にでも平等に接する、即ち「同じように見なす」こととはかけ離れているのではないだろうか。

近年は社会のグローバル化がどんどん進んでおり、日常生活の様々な場面で外国の方と関わる機会が多くなってきている。しかし、そういった場面で同じ日本人同士で固まり、外国の人と意思の疎通を図ろうとしない態度をとる人が多ければ多いほど、多文化社会の完全な実現は厳しくなってくるだろう。歴史からも分かるように同胞意識は大切だが、そこに執着しすぎないことで多くの人と関わることができ、多くの人と関わることで、この多文化社会の中で同じように見なす力が育まれるのだと私は考える。それができて初めて「多文化共生」を実現する一員になれる、つまり日本語教師という私の夢へ近づくことができるのではないかと思う。

優 秀 賞

同じようにみる、その勇気」

兵庫県立夢野台高校2年生 巽 亮太 さん

今回の「世界史から学ぶ多文化共生」という講演を聞き、改めて自分が生きる社会が多くの文化や価値観で成り立っていることを考えた。先生の話によると、現代はグローバル化が進み、異なる文化や価値観を持つ人々と生活を共にすることが当たり前になってきている。しかし、それは同時に多くの課題も抱えており、簡単に実現できるわけではない。その中でも特に印象に残ったのが、「こころの壁」という言葉だった。

多文化社会を妨げるのは、制度や法律の問題だけでなく、人と人にある見えない壁だ。言葉や習慣、宗教や価値観の違いなど、心の中で相手を同じように見られない気持ちだと思う。頭では平等に接しなければと分かっている、無意識に区別してしまう。これは私自身も異文化の人と接するとき感じたことがある。先生は歴史の中からも、多文化共生の可能性と難しさを示す例を挙げていた。中でも、明治時代の日本が西洋文化を積極的に取り入れ大きく発展した話は印象的だった。もし当時、外国文化を排除していたら、いまの日本の発展はなかっただろう。文化を受け入れることは成長につながると、歴史が証明している。

一方で、文化を受け入れる過程では衝突も起きる。人間は「良心」という内なる法廷を持っており、日常で差別やいじめなどを見た時に「それはおかしい」と感じる。この感覚は宗教や法律以前に人間が本来持つもので、先生は聖書の教えも紹介していた。「外国人があなたのもとにいるなら、同じように暮らさなければならぬ」というもので、ただ共に住むものではなく、平等に扱うことを求めている。何千年も前から語られてきたこの言葉が、今も実現困難であることに驚いた。

私は異文化交流というと、特別な場面を想像しがちだったが、実はもっと日常的なことだと気づいた。同じ国にいても地域や家庭の文化、価値観は異なってくる。その違いに対し「同じように見られるか」が共生の第一歩だ。例えば学校で転校生や帰国子女にどう声をかけるか。こうした小さな積み重ねが、多文化共生の基盤となると感じた。もちろん、互いを理解することは容易ではない。価値観の違いは衝突を生み、相手を否定したくなることもある。それでも、「なぜそう考えるのか」を知ろうとする姿勢が大切だと思う。多文化共生は相手を変えるのではなく、自分の見方や心を広げることから始まるのかもしれない。最後に先生が言った「期待したいし、期待されたい」という言葉が心に残った。相手を受け入れるというのは、信頼と期待があるからこそできること。そして自分も期待される存在でありたいという思いが、共生社会を動かす力になると感じた。

この講演を通して私は「こころの壁」を意識するようになった。壁を無くすには、自分の偏見や先入観に気づき、相手を同じように見る努力を重ねることが必要だ。文化を受け入れることは私たちが成長させる。これから異なる文化や価値観に出会った時こそ学び、楽しみ、壁を低くしていきたい。さらに、自分から積極的に交流の場を作ることも大切だと思う。待っているだけでは距離は絶対縮まらない。小さな会話や共同作業を通してこそ、相手の本当の姿や考え方に触れられる。そうした日々の積み重ねが、未来の「多文化共生社会」を確かなものにしていくと、信じている。そしてなにより、この考え方は国際関係や大都市だけでなく必要なものではない。地方の町や小さなコミュニティ、さらには家庭の中にも異なる文化や価値観は存在している。そこに気づき、互いに受け入れ合う姿勢を持てたなら、私たちは自由に、もっと安心して共に生きられる社会に近づくのだと強く感じた。そしてそれは、私たち一人ひとりの手で築ける未来でもある。

優 秀 賞

「みんなちがって、みんないい」

和歌山県立桐蔭高等学校 2 年生 宮崎大輔 さん

私は、今回の動画「世界史から学ぶ多文化共生」を通して、世界の歴史を学ぶことが、単なる知識の習得にとどまらず、現代社会での異文化理解や共生のヒントになることを改めて実感した。講師の村山秀太郎氏は、世界史の視点からさまざまな文化の交流や衝突を紹介し、その中で人々がどのように互いを理解し、共存してきたのかをわかりやすく解説していた。歴史上の出来事は遠い昔の話に見えるが、そこには現代社会に通じる普遍的な教訓があることに気づかされた。

私が特に印象に残ったのは、「異なる文化や価値観に触れることの重要性」についての話である。世界史を見ると、異なる民族や宗教、言語を持つ人々が互いに影響を与え合いながら社会を形成してきたことがわかる。これらの事例から、異文化を理解する姿勢は決して単なる知識欲ではなく、他者との関係性を豊かにする手段であると感じた。村山氏が強調していた「違いを尊重することの大切さ」は、現代の多文化共生社会に生きる私たちにとって、教科書以上に価値のある学びである。

この動画を見ながら、私はルーマニアでの経験を思い出した。国際交流の一環で訪れたルーマニアでは、現地の伝統衣装を試着する機会があった。最初は、ただ珍しい衣装を着ることが楽しいという好奇心だけで臨んだが、実際に袖を通してみると、その背後にある歴史や文化、生活の知恵を自然と感ずることができた。たとえば、刺繍の模様や色使いには地域ごとの意味や季節感が込められており、単なる装飾ではなく、生活と深く結びついた文化であることがわかる。その瞬間、私は教科書や映像では得られない、身体で感じる文化の力を実感した。さらに、その衣装を通して現地の学生と交流する中で、「違い」を受け入れることの面白さにも気づいた。言語や習慣が異なっても、共通の体験を通して自然に会話が生まれ、互いの文化を尊重し合えるのだ。動画で村山氏が述べていた「異文化を知ることで自分の価値観も広がる」という言葉を、私はまさにこの体験で実感した。異なる文化に触れることで、自分自身の考え方や視野を相対化し、新しい価値観を取り入れる柔軟さが身につくのだと感じた。

また、動画では世界史の中での衝突や対立の事例も紹介されていた。文化の違いが誤解や摩擦を生むこともあれば、それを乗り越えて交流や共存に至った例もある。ルーマニアの衣装体験では、表面的には小さな文化体験に過ぎないが、背景には歴史や地域社会の努力があることを知り、異文化理解の奥深さを改めて感じた。小さな体験からでも、多文化共生の意義や課題を考えるきっかけになるという点で、動画と私の経験は重なる部分が多かった。

この感想文を通して思うのは、多文化共生は単に他者を受け入れることではなく、異なる価値観を理解し、自分自身の考え方を見つめ直す機会であるということだ。世界史から学ぶことは、過去の知識を得ることだけでなく、現代を生きる私たちの行動や考え方に直結している。ルーマニアでの経験と動画の学びを結びつけると、異文化に触れることの意義は、知識の習得以上に、自分自身の成長や他者との関係性の深化にあることがわかる。

今後、私は学校生活や日常の中で、多様な価値観や文化に積極的に触れる姿勢を持ち続けたい。海外での経験だけでなく、国内でも多文化共生の視点を意識し、違いを理解し尊重する行動を心がけることが、より良い社会を築く一歩になると信じている。動画と体験を通して学んだ「違いを認め、共に生きる力」は、私の人生において大切な指針となるだろう。

このように、動画「世界史から学ぶ多文化共生」とルーマニアでの体験は、私にとって単なる学びや思い出にとどまらず、日常生活や将来に活かせる大きな示唆を与えてくれた。歴史や文化の多様性を理解することで、私たちは自分自身の可能性も広げることができる。この学びを胸に、今後も積極的に異文化に触れ、多文化共生の実践者として成長していきたい。

優 秀 賞

「対話の中で違いを楽しむことができたら」

大阪教育大学附属高等学校池田校舎 2 年生 阿部 夏宝 さん

“違い”を認め、受け入れるということは難しいことだ。例えば、学校行事などを進める際には様々な意見が出るし、家庭でも世代によって常識が異なる。意見が同じであるとスムーズに進むし、常識が同じだと不快感がなく安心して一緒に過ごしやすい。では、“違う”ということは悪いことなのか。いや、悪くない。“違う”ということが新しい発見や面白さにつながることもある。そして、“違う”ということは珍しいことではない。ただ“違う”者同士が生活していくためには、相手を理解したいという気持ちを持って対話することが必要だ。そして、相手が自分を理解し、認めてくれた時、嬉しい気持ちになり、相手のことも理解し、認めようという気持ちになる。日本は島国で、今まで他の民族や宗教、文化に触れるということが多くなかったが、現代では他国との交流が盛んな上、移住も増えたため、他の民族や宗教、文化に触れる場面が増えている。そして、文化の違いに戸惑う様子をニュース等で見ることがある。そんな現代では、多文化共生について、世界の歴史や、現代世界で多文化共生を実現している国から学ぶことができるのではないだろうか。多文化共生社会を構築できず、一方の人々が自分たちの生きやすい社会を構築し、幸せを感じているとする。もう一方の人は、権利や自由が奪われ、生きにくく、幸せを感じることができないとする。権利や自由を奪われ、生きにくい社会で生きている人たちは、自分の属している地域に貢献したい、その地域をより良くしていきたいといった気持ちになるだろうか。私は、そのような気持ちには至らないのではないかと思う。今回の動画を見て、オスマン帝国が長く存続したのも、現在たくさんの民族や言語を持つインドネシアが多文化共生社会を実現しているのも、それぞれの宗教や文化を尊重しているからだということを初めて知った。旧約聖書には、「外国の人も私たちと同じように見なされるべき」とある。これらの歴史から、「この人は自分と違う」という心の壁を取り払うこと、そして、みんなが良心をもち備えることが大切だとわかる。私は、争いで、同じものを信仰させようとしたり、同じような生き様で生きさせようとしたりすることは無意味だと考える。なぜなら、人の心は、争いでは動かせないと思うからだ。人を動かすのは、対話であり、認められた、分かってもらえたという安心感や希望だと思う。

私はこの夏、大阪関西万博に行ってきた。様々なパビリオンを見学し、その国の食べ物を食べたり、建造物を見たりし、その国が力を入れていることなどを知ることができた。知ることはとても興味深く、楽しいと感じた。知ることが理解に繋がり、違いを面白がるのが共生に繋がると感じた。私は小学 1 年生の頃、姫路城に入場する列に並んでいる時に、私よりも小さい中国からの旅行客の女の子と仲良くなったことがある。その子やその親は、日本の文化や習慣を理解しようとしていたし、入場の列を守り長い時間静かに並んでいた。並んでいる間、私達は折り紙で交流した。兄が韓国の高校生をホームステイで受け入れをした時、韓国の生徒さんは日本のことを知ろう、理解しようとしていた姿が見て取れた。また日本のことを好きになってくれて、その後も何度も来日してくれている。私たち家族も相手の文化を知ろうと努め、相手の文化に敬意を払っている。私たち個人個人が、一方通行ではない対話を心がけて暮らすことが、多文化共生社会構築の一助となるのではないか。また、国同士の良好な関係にも繋がっていくのではないかと考える。

なぜ多文化共生を実現しなければならないのか。ひとりひとりが生き活きと暮らし、力を発揮できる社会になれば、地域や社会に活力が溢れ、人々も社会も豊かになるからだ。また、そういう社会は、食や音楽、芸術などの魅力も高まると思うからだ。ひとりひとりが認められ、力を発揮できる社会の担い手となれるよう、相手のことを理解しようとし、自分のことも理解してもらえようコミュニケーションをとっていききたい。

優 秀 賞

「日本の課題」

兵庫県立川西カリヨンの丘特別支援学校猪名川町分教室 1 年生 中山 紗菜 さん

私は動画を見て日本の課題を考えるきっかけになりました。

例えば私が一番に思いつく日本の課題は、偏見や差別がされることだと思います。

言葉の違いや肌の色の違いなどで、偏見や差別をされたと言うニュースをよく見たり聞いたりするからです。なぜなら最近では外国人労働者が増える中で、言葉の『壁』や文化の違いからのトラブルになることもあるというニュースを見ました。このような様々な人々が共に生きるためには、違いを知って、理解しようとする心が大切なんだなと思いました。

この課題が、一番に思いついた理由は、私は過去に肌の色の違いや言葉の違いではないのですが、障害者だからと言う理由だけで差別を受けたことがあるからです。一番嫌だったことは、何もしていないのに嫌な顔をして避けられたことです。これが私の日本の一番の課題だと思った理由です。日本だけではなく世界で偏見や差別をする理由は、文化の違いや言葉の違いを『壁』だと考えていからだと思っています。なぜなら私たちは知らないものに対して不安に感じることもあるからだだと思います。この不安が『違う』と言うだけで相手を拒む態度につながってしまうのではないのでしょうか。

私は、言葉や文化の違いを『壁』だと思わずに日本を豊かにするものだと考えています。

今後、日本が私たち日本人や海外の方が住みやすい土地にするには、多様性を認めることだと思います。例えば、見た目や話し方、考え方、宗教、価値観などの様々な違いを認め合うことだと思っています。全く同じ人間はこの世界に誰 1 人いないからこそ違いを認めてお互いを尊敬、尊重する社会が必要だと思います。

私は将来、子供や大人に対して多様性の大切さを伝える活動をしたいです。

学校や地域での小さな一歩が、より住みやすい世界を作る一歩になると信じています。

世界中の人たちが住みやすい世界になりますように。

優 秀 賞

「多文化共生と距離感」

兵庫県立夢野台高等学校 2 年生 久保 紗羽音 さん

現在、ガザ地区のハマスとイスラエルの間で起きている抗争は、呼び名の違う同じ神を巡るものである。同じ神、同じ信仰を守るために戦うことは「一緒に住む人を虐待してはならない」という神の言葉に背くことであり、結果的に彼らが最も大切にしている信仰を蔑ろにする結果となっている。

同じ信仰を持つ者同士ですら争う国で、果たして違う信仰や文化を持つ者同士が暮らし、多文化共生が達成できるのだろうか。

歴史を振り返ってみると、多文化共生を実現していた国も存在する。まずはオスマン帝国を見てみよう。この国はなんと 650 年余りも続き、かつ多文化共生が達成されていた国である。オスマン帝国はヨーロッパ、北アフリカ、アジアの広い地域を含む国で、多くの文化、言語、そして宗教が混在している国であった。一番信仰する人が多いのはイスラム教であったが、イスラム教による他宗教の排外は行われなかった。その理由が、「ミット」と呼ばれる宗教共同体の存在である。それぞれの宗教を信仰する人たちが集まり団体として税を納めることで、他のミットに干渉しないことを条件に自分たちのミットにも干渉されない権利を持った。またそれぞれのミットは婚姻、教育、裁判などの内政に置いて一定の自治権を持ち、法律に関しても宗教に基づく法や刑罰を使用することが許されていた。つまりこれは、良い意味で「無関心」なシステムなのである。無理に関わり合うこともないが、争うこともない。一見冷たいように思えるが、実は誰も傷つくことなく自分の信仰や文化を守ることができる。

一方で、人と関わらない生活を送っているのは多文化「共生」とはいえない。ここで参考になるのが、古代ギリシアの政治だ。ヘレニズム時代、アレクサンドロス大王はアフガニスタン、ヨルダン、エジプトなど広い地域を一つの国として治めていた。古代ギリシアの人々はヘレニズム時代に入るまで、他地域の異なる文化や宗教を信仰する人々をバルバロイと呼び排除してきた。しかしヘレニズム時代になると、「バルバロイと共生する」ことを目的としたコスモポリタリズム、世界市民主義が採られはじめる。つまり自分たちとバルバロイの間の垣根をなくし、一つの団体として共生しようという動きである。

これらのことから、多文化共生とは「距離感」によって成り立つものではないかと考える。上に上げた 2 つは、この「距離感」が極端な例であり、かつ多文化共生への足掛かりだ。オスマン帝国は、距離感が遠く、文化や信仰の異なるものをお互いに遮断し心地の良い仲間だけで暮らす政治。古代ギリシアは距離感が近く、お互いを遮断するものをなくし文化や信仰を許容し合うことで皆が一つの団体として暮らす政治。違った形で多文化共生を達成してきた 2 つの国だが、それぞれ違った問題を抱えている。前者は、ライフラインが止まってしまったとき誰にも頼ることができないし、後者は許容し合って平和な暮らしをしていても、誰か一人が許容できなくなれば崩壊してしまうという危うさを持っている。

これからの世界で多文化共生を達成するためには、どこまでを許容できてどこまでを許容できないのか、そのラインや距離感を見極めることが大切だと思う。もちろん簡単なことではないし、途方もない時間がかかる。だが、距離感を見極める過程でお互いのことを知ったり、過去に多文化共生を達成できていた国のことを知る機会もあるだろう。そうすれば、多文化共生の達成へのスピードは少しずつ速くなるはずだ。国や地域単位で私たちにできることは多くない。だからまずは、個人同士の関わりにおいて相手を知り、距離感を見極めることで相手を尊重することが、多文化共生に繋がるのではないだろうか。